

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六三年四月五日 横浜定例講演会より

『日本人は勤勉な民族』

神様と共に働き
神様と共に食す

師 『蘇れ日本人』シリーズ

ズとして、本日は日本人が大変に勤勉な民族であるというお話をさせて頂きます。外国からは「日本人は働きすぎである」というふうな批判を被ることがありますけれども、何故そういうふうな批判を被るのか。

これは日本人の場合には、昔から『共働共食』、共働きと書きま。今は「共働き」と言いますと、だいたいご夫婦で働くという事を共働きと言っておりすけれども、神道では昔から『共働共食』ということで、神様と共に、神様というとわかりにくいと言うのであれば、大自然と共に働く、そして大自然の恵みを受けて神様と共にあるいは、大自然と共に食事をするという意味です。

最近では別のところでも、同じ様なことを言っているところがありますけれども、食事の「食」という字は、ただ人が食べれば良いというのではなくて、「人を良くする」と書くのです。食べるという事は人を良くするために食べるのです。だから悪い事をする

人とか、社会を悪くする人は、食べなくてもいいのですよね。「人を良くする」、これが食事の「食」です。先程言いましたように、大自然と共に、あるいは神様と共に働き、そして神様と共に食事をするといいことです。

従って、日本人が働き者で、「勤勉である、働きすぎだ」というふうに言われるけれども、神様とご一緒に働くわけですから、そこには喜びがある。私達は「神の子」あるいは「仏の子」という風に言われておりますから、いわば神様・仏様は、人類にとって親にあたる、その親と共に働くのだと。したがって親元で親と共に働くから喜びを持って働くんですよということなんです。

そういった意味で、神様と共に、あるいは大自然と共に、あるいは別な言葉で言えば、親と共に働くというのが原則です。したがってまたそこで働いて実った食事を共に頂く、最近ではこういって「共食」という部分が少なくなりました。以前にはと言いますか、戦時中は学校から神社に行つて参拝する、いわゆる旗日という現代の祝日に当たる日には、お宮さんでお饅頭とか紅白のお餅を頂いたものです。

大人の方はその後お神酒を頂くというふうなことをしておりました。そういった機会が非常に少ないので皆さんにはわかりにくいかも知れませんが、今でも神社の御祭等の後には、やはりお神酒を頂く、そして本来ですと軽いお食事を頂く。これが「共食」の部分ですね。神社ではここでの共食のところを、直接の「直」という字に「会」という字、これで「直会」（なほらい）と言います。神様と直接会食をするという意味です。

ですから、いわゆる神社の御祭の後、神様と直接会食をします

よとこれが『共働共食』という本来の意味でございます。神様と共に働き、神様と共に直接会食をするということですから、大自然をととも大切にします。大自然との調和とか、大自然との共生、あるいは大自然との「共存共栄」ということが昔から言われてきたのです。

大勢の神様と喜びをもつて

そして日本の場合には八百万の神様がいらっしやる。字で書くとは山は山の神様、川には川の神様、野には野の神様、田の神様、そして海には海の神様というように、大勢の神様がいらっしやる。山には山の神様、川には川の神様、野には野の神様、田の神様、そして海には海の神様というように、大勢の神様がいらっしやる。

代表的には山の神様は大山祇神様、海は大海津見神様というふうな名前前で呼ばれますけれども、すべて神様のお名前を覚える必要はございません。大勢いらっしやる八百万神様のお名前全部を覚えるのは大変でございます。そういうふうにはそれぞれ担当の神様がいらっしやる。農業にしましても漁業にしましても、そういう田の神様、あるいは海の神様、木こりの方であれば山の神様、それぞれその働く場所によって担当の神様と共に働く、その喜びというものを感じていたわけです。

したがって先程の『共働共食』の部分でも、神様の恵みを頂くのだと、頂戴させて頂きますということと食事をする時に、「頂きます」ということを言って頂戴する。頂き終わると「ご馳走さまでした」ということを自然に言ってきたわけでございます。最近ではそのこと自体が宗教的な意味合いを持つからということ、小学校・中学校でも、いわゆる学校給食を頂く時に、「そういう言

葉を使つてはいけないんだ」と言う。大変驚くような事を耳に致しますけれども、そういった事は直接宗教とかではなくて、古来からそういうふうに行われてきたのです。

私が、「神様と申し上げても、大自然と言っても良いですよ」とあえて申し上げるのは、神様という宗教という風に捉えられてしまうものですから、あえて「大自然と言っても良いですよ」という事を申し上げているわけです。そういった意味合いで、神様と共に、あるいは大自然と共に働くということ、常に日本人は神様と共にですから、喜びを持って働くのだということです。

古には伊勢神宮におわします天照大神様が御自ら高天原の斎庭いばに稲穂をお作りになる、いわゆる田植えをして、そして稲刈りをされる。その斎庭の稲穂、大変難しい言葉を使いますけれども、神様の世界では独特な言葉を使いますから、斎庭の稲穂の御神勅みかみというものがあります。

これは天照大神様の三大神勅の一つです。お孫さんである邇邇岐命様が高天原からこの中津国と言われる日本の国に降りてこられる時に、お渡ししたものが三つ、いわゆる三種の神器、神器奉斎のご神勅、斎庭の稲穂のご神勅、それからもう一つが天壤無窮のご神勅、要するに御皇室は永久に、天地と共に窮まりなく栄えていくという、この三つのご神勅。

その内の一つが斎庭の稲穂という、斎庭と言いますのは清まった庭という意味です。高天原の清まった庭にお植えになったその稲穂の種を邇邇岐命様に持つていくようにした。ということは、天照大神様も高天原で田植えをなさられ、稲刈りをしておられた。

そういうことで、現在でも、歴代の天皇様は宮中においてお田植をなさされ、また稲刈りをなさっておられる。皇后様の場合には蚕を飼って、養蚕の方をなさられるということでございます。

そういうふうにも古の天照大神様がなさられたことを、今でも天皇陛下はお田植とか稲刈りをなさられるという風に連綿と続いているわけでございます。

ただ戦後の日本というものは、ある時期に多くの農薬を使ってしまうました。ドジョウとか、あるいはタニシという生き物が消え去るほどの強い農薬を使っていますので、神様がいらっしやらない田畑が多くなっているということです。大変困りますのは、神様は黙って立ち去られるのですね。

人であれば捨て台詞でも言っていく。「もうこんな汚い所は嫌だよ。もう俺はここには居ないぞ」と言われると、「神様、大変申し訳ございません。今からでも綺麗に致しますから、せひ残って下さい」と言えるけれども、そういう人の世の捨て台詞のようなことは一切ございません。神様は黙って去って行かれるのです。

従って、今になって「やはり無農薬が良い、自然食品が良いんだ」ということで急にしようとしても、周囲が農薬を一杯使っている時には、農薬を使わない所に集中的に虫がついたりして、実りがなかなか難しいというふうな実話を伺いますけれども、そういった時には「抜い」というものをすれば良いのですよね。綺麗に抜いておいて「神様、お戻り下さい」という儀式をすればよろしいのです。

特に古において秋の実りの時というのは、「マゼ這虫の抜い」という

のがあるのです。「這虫」と言うから、いわゆる蛇のように這う虫かなと思つたらそうではなくて、今で言うイナゴの事です。実りの時になるとイナゴが一杯出てきて実った稲米を食べてしまう。そのイナゴを抜うという神事がございます。そういうふうにも昔から実りの時には這虫の抜いをするとか、神様のご意志に沿った、あるいは大自然の法則に沿ったことをしてきたわけでございます。

現在の私達は何気なく使っている言葉、男性には「殿」、最近では封建制度ではありませんから、殿とか殿様という言葉は一般には使わないと思います。しかし、今でも手紙文などには何々殿という風に使うことがございます。女の方は、ともえ御前であるとか、とら御前という風に使います。

何故こういう言葉が出てきたかと言いますと、伊勢神宮の所から志摩半島の方に少し行きますと、元伊勢伊勢神宮の天照大神様が元いらっしやった、やっと辿りついて現在の伊勢神宮に辿り着きましたけれど、その前に「伊雑の宮（いざわのみや）」、あるいは「いぞうのみや」とも言うそうでございますが、そういう所がございます。

この神社の御殿の方に入るのが男性、女性はその御殿に入る前の門前に控えるというので、男性は「殿」、女性は「御前」と言われるようになったと言われております。女性の場合には「御前」、男性の場合には「殿」、御殿に上がる、これは神代の話ですが、その後平安時代になると、宮中の清涼殿に上がる人のことを殿上人というようになったのですね。

先程も言いましたように農薬を使いますと、神様は汚れた所にはいらっしやいません。また臭いのきつい所にもいらっしやいま